

弥生時代

成田誠治

昭和56年の11月に青森県教育庁文化課の試掘調査によって、南津軽郡田舎館村垂柳遺跡から弥生時代中期の水田跡が発見された。⁽¹⁾ 翌57年に垂柳遺跡調査会が組織され、58年まで発掘調査した結果、弥生時代中期の水田稲作の様相が明らかにされた。

さらに、この調査中に三戸郡南郷村松石橋遺跡出土の土器が弥生時代前期の遠賀川系土器であることが分かった。⁽²⁾ それまで、縄文時代晚期終末期の土器型式とされていた砂沢式土器出土層の土器を調べ直したところ、遠賀川系土器破片が共伴していることも明らかになった。土器と共に水田稲作の有無が課題とされるようになった。

昭和59年から4年計画で弘前市教育委員会が発掘調査した砂沢遺跡で検出された水田跡が、砂沢式土器包含層と同一層であることが昭和62年に確認された。これによって、砂沢式土器期に水田稲作が伝播したことが確定的になった。⁽³⁾

水田稲作は、南から伝播したものであるが、住居跡や墓の様相は、輻輳した文化状況を呈している。

ここでは住居跡・墓・生産遺構を項目分けして発掘調査の状況を述べることとする。

住居跡

前期の住居跡は、これまで10遺跡から発見されている。多い地域は、八戸市とその近辺である。八戸市内では当センターが発掘調査した弥次郎窪遺跡から3軒、八戸市教育委員会が発掘調査した八幡遺跡から1軒、牛ヶ沢⁽⁴⁾遺跡から4軒が検出されている。また、当センターが発掘調査した南郷村畠内遺跡では6軒、三沢市教育委員会が発掘調査した小山田⁽²⁾遺跡では2軒検出されている。

下北半島では、東北大学が発掘調査した脇野沢村瀬野遺跡から1軒、当センターが発掘調査した東通村前坂下⁽³⁾遺跡から1軒、六ヶ所村大石平遺跡から2軒検出されている。

西海岸では、当センターが発掘調査した深浦町津山遺跡から2軒の住居跡が検出されている。

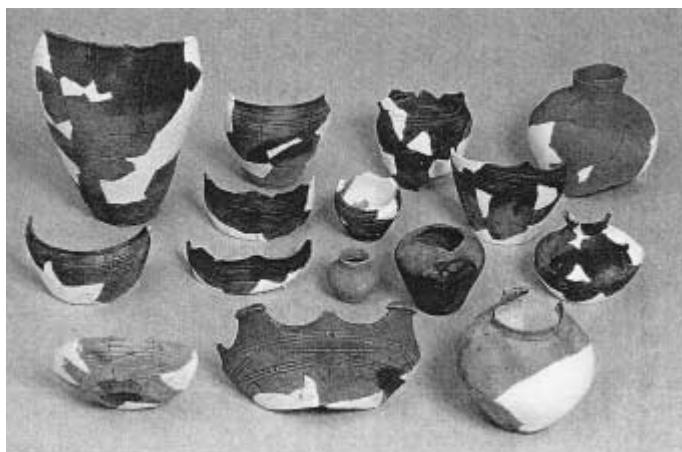
津軽平野部では、平賀町駒泊遺跡から部分的ではあるが2軒検出されている。

これらの住居跡は、川のほとりの割合緩い傾斜地や海岸に近い平坦地にある。住居跡の平面形は、橢円形や不整な円形で、規模は最大のものが瀬野遺跡の拡張された住居跡で9.8m×9.5mあり、最小のものが弥次郎窪遺跡第2号竪穴住居跡で3.3m×3.2mである。炉は、地床炉もあるが石囲炉が多く、炉内に土器が埋設されている例が見られ、この時期の特徴となっている。

畠内遺跡は、新田川中流域左岸にあり、縄文時代と弥生時代の複合遺跡である。平成4年～平成7年の発掘調査で6軒の竪穴住居跡が検出されている。いずれも前期で平面形が橢円形である。方位は、長軸が東西方向のものが4軒、それ以外のものが2軒である。炉は、すべて石囲炉で内部に土器が埋設されているものが3軒ある。出土土器は型式は砂沢期が多く、これに後続する時期のものが1



南郷村松石橋遺跡出土土器



南郷村畠内遺跡出土土器

軒（第54号）ある。また、遠賀川系土器が混在している住居跡も1軒（第53号）ある。住居跡の配置は、少し高くなっている平坦地の端に4軒、一段低い緩斜面に2軒並んでいる。出土遺物が多かった住居跡は、第53号で壺・台付深鉢・浅鉢などの土器や石鏃、石刀、土偶脚部が出土している。第54号からは、甕・壺・台付鉢・鉢などの土器や石匕・敲磨器が出土しており、その組み合わせが注目される。平成9年度には捨て場から多量の土

器に混じって遠賀川系土器や石製品が出土している。

牛ヶ沢⁽⁴⁾遺跡では、住居跡4軒と同時期の土坑が7基検出され、小山田⁽²⁾遺跡では住居跡2軒のほか土坑が5基検出されている。弥次郎窪遺跡では、住居跡のほかに竪穴遺構3基と土坑2基検出されている。津山遺跡では住居跡から少し離れた所に建物としては組めないランダムと思える柱穴群があり、それより低いところから土坑が検出されている。

八幡遺跡では、住居跡全域を発掘調査していないが、床面に接する土壤を採取して北海道大学の吉崎昌一氏がフローテーションを実施した。これによって得られた炭化種子は、コメが最も多く、ほかに栽培植物種子としてアワ・キビ・ヒエ・オオムギ・コムギなどがある⁽⁵⁾。

大石平遺跡の前期住居跡は2軒で、いずれも橢円形を呈し、炉には土器が埋設されている。炉の形態は地床炉のものと石囲炉のものがある。

以上のほか、平賀町駒泊遺跡からも前期住居跡の一部が2軒検出されている。

中・後期では、八戸市教育委員会が発掘調査した風張⁽¹⁾遺跡と当センターが発掘調査した六ヶ所村大石平遺跡がある。

風張⁽¹⁾遺跡は、新田川の下流域に近い場所の右岸丘陵に立地しているが、南面する緩傾斜地から住居跡が5軒検出された。これらの時期は、中期が4軒、後期が1軒である。平面形は、円形に近いものが1軒、不整な橢円形が2軒であるが、調査区外へ延びるため全体の形状・規模を知り得なかつたものが後期の1軒を含め2軒あった。炉が残存しているものが2軒で、このうち1軒は地床炉、もう1軒は3ヶ所に火焼部分が見られるものである。出土遺物は、前期の住居跡では壺・甕・鉢・深鉢・台付鉢などの土器やスクレイパー・磨製石斧・くぼみ石などの石器が出土している。後期の住居跡から深鉢、覆土から石鏃・石錐・スクレイパー・石匕・磨製石斧・凹石等が出土している⁽⁶⁾。

大石平遺跡は、老部川右岸の低平丘陵上にあり、弥生時代の遺構は遺跡内ほぼ中央部にある湧水地とそれを水源とする川べりから検出された。前述した前期の住居跡は、水源地直上の高い所から検出されている。この場所より東側に中期の住居跡1軒、土坑3基、埋設土器遺構1基検出されている。

中期の住居跡は、南北方向に長軸を持つ橢円形の竪穴住居跡が1軒で、炉は検出されていない。後期の遺構は、中期のエリアよりさらに東側にあり、住居跡6軒、竪穴遺構7基、土坑1基、焼土遺構1基、埋設土器遺構1基検出されている。後期の竪穴住居跡の平面形は不整橢円形が多く、ほぼ円形

が1軒ある。規模は、最大のものが推定で東西6.96m、南北5.80mであり、最小のものが東西3.6m、南北4.7mである。炉は地床炉が2軒で、石囲炉が2軒である。掘り込まれた内部が焼けている施設が検出された竪穴住居跡が2軒あり、このうち1軒からはこれが3基検出されている。特殊な施設としては、壁外に盛土を持つものが1軒あった。

墓

人骨の出土例はないが、土坑墓と甕棺墓が発見されているので時期ごとに見ていくこととする。

前期では、尾上町教育委員会が昭和57年に調査した五輪野遺跡から甕棺墓が1基検出されている。この遺跡では、このほかに同様の甕棺が以前の道路工事中に掘り出されている。これらは、いずれも頸部と胴部の境目及び胴部に平行線文と2列の点列文が施文された大型甕に縄文施文土器が被せられた状態で埋設されているものである。⁽⁷⁾

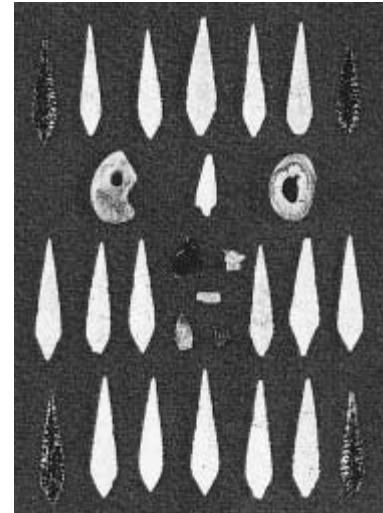
弘前市宇田野⁽²⁾遺跡は、平成6年から翌年まで当センターが発掘調査を行い、5基の土坑墓を検出した。平面形は、いずれも長楕円形である。遺物出土状況として坑底直上から石鏃28点(黒曜石が80%)が出土した第1号土坑墓が注目される。また、底面に近い層からベンガラが認められた土坑墓が2基あった。この遺跡は、大石川左岸の低い丘陵地の南側に傾斜する緩斜面地であるが、さらに南側の谷間に、前期初頭の捨て場が認められた。

中期では、青森県立郷土館が昭和50年~52年・62年に発掘調査した三厩村宇鉄遺跡から11基の土坑墓と4基の甕棺墓が検出されている。この遺跡は、元宇鉄川河口右岸の標高約20mの段丘上にあり、墓は平坦地のほぼ中央部分から検出されている。土坑墓の平面形は円形が2基、楕円形が9基で、甕棺は土坑内に斜位に2個埋設されているものと正立位に1個入っているものがある。土坑墓内から、恵山型式に見られる熊の意匠を表した把手付カップ形土器や底の丸いボール形土器及び靴形石箆・石銛などが出土しているものもある。一方、北陸産の翡翠製丸玉や碧玉製管玉が出土する土坑墓や甕棺墓もある。356個の管玉と翡翠製丸玉1個出土した第14号土坑墓が特記される。⁽⁸⁾

川内町板子塚遺跡は、平成4年に当センターが発掘調査をして多くの土坑墓が検出された。土坑内から石鏃が12点以上出土するものがあり、最も多く出土した第8号土坑墓は特記される。この土坑墓の平面形は長方形で規模が226cm×198cmで、遺物は石鏃134点、環状赤色顔料1点、黒曜石剥片1点、翡翠製勾玉1点、凝灰岩製玉1点、土器片7点、鉄小片及び板状石が出土している。ほかの土坑墓も長方形が多く、不整六角形、不整方形、楕円形もみられる。この遺跡の立地は、川内川下流域左岸の標高28m~30mの場所で、土坑墓は緩斜面に群を成して構築されている。

以上のか、土坑墓が田舎館村垂柳遺跡や尾上町五輪野遺跡から検出され、甕棺墓が尾上町丑盛⁽⁹⁾(五輪野遺跡内)と平賀町大光寺新城跡から検出されている。⁽¹⁰⁾

後期では、六ヶ所村千歳⁽¹³⁾遺跡から1基検出されている。この遺跡は、下北半島の付け根部で低平な丘陵が続く場所にある。墓は、標高82mほどの場所で、丘陵上の端に近い所から検出された。土坑墓は長楕円形で、堆積土は人為的で、上の層から天王山式に相当



川内町板子塚遺跡第8号
土坑墓出土遺物

する鉢形土器が倒立状態で出土している。

生産遺構

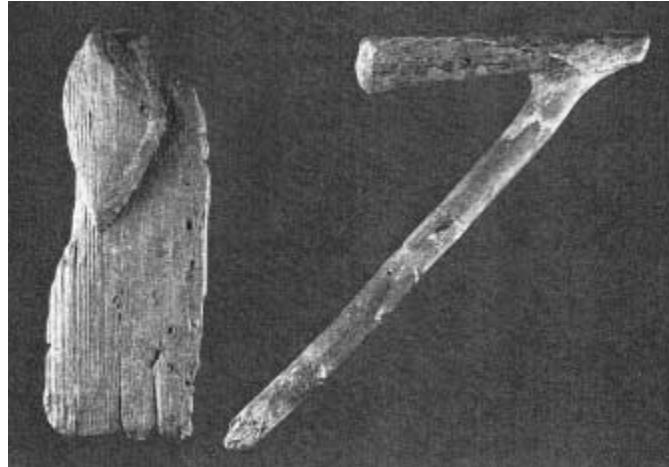
水田跡が、前期の弘前市砂沢遺跡、中期の田舎館村垂柳遺跡から検出されている。

砂沢遺跡は、岩木川下流域左岸の微高地で、標高15m～20mの場所にある。検出された水田跡は、断片的なものが多く全体を知り得たものは2号水田跡だけである。この平面形状は、長方形で長辺15.4m、短辺5.24m、面積が81.27m²である。畦畔の幅や高さは、場所によって異なるが幅40cm～215cm、高さ2.3cm～29.4cm、深さ17cm～29cm、大きい溝では幅75cm～155cm、深さ27cm～72cmである。出土遺物は、砂沢式土器や遠賀川系土器及び土偶・土版、石器や石製品などがある。ほかには炭化米や種子も出土している。

垂柳遺跡は、浅瀬石川左岸微高地のほぼ平坦な場所に立地している。水田の規模は14m²が最大級で、11m²、9m²、4m²にまとまりが見られ平均約8m²である。形状は方形に近い長方形が多く、扇形を呈するものも若干ある。昭和58年までに656枚の水田跡が検出されているが、それ以降も田舎館村教育委員会で範囲確認調査を続行し、当センターでも平成7年に広域農道予定地を発掘調査し、検出枚数はさらに増えている。これまで出土した遺物は、多量の田舎館式土器や石器、各種木製品（鍬、石斧の柄、漆塗盾状製品、柄杓、発火具等）、琥珀製臼玉、管玉などである。石器は、石鏃、石錐、磨製石斧、凹石、磨石などが出土し、また石核や剥片も出土している。磨製石斧は、縦斧と横斧に区別できる。縦斧が両面凸刃（蛤刃）で、横斧が扁平な片刃である。また、木製柄杓の柄先端には動物（熊）の顔が彫刻されている。



田舎館村垂柳遺跡の水田跡



田舎館村垂柳遺跡出土の木製品

（青森県埋蔵文化財調査センター次長）